

芳野満彦著 『山靴の音』

本書の著者については、今更紹介するまでもなからう。彼は高校生の時、友人と二人で猛吹雪の八ヶ岳で遭難、友人は凍死、彼は1週間後にかろうじて救出されたが、激甚な凍傷を負い両足の指全部を切断する羽目になった。この経緯は本書の「雪と岩の中で」に詳しい。両足の指全部を失うというハンディキャップを乗り越えて以後も困難な登攀に挑み、穂高や剣での多くの岩場の初登攀を成し遂げ、ヨーロッパ・アルプス三大壁の最難関といわれたマッターホルン北壁の日本人初登攀にも成功した。新田次郎の『栄光の岩壁』のモデルでもある。

今でこそ治療技術も進歩し、またそのような目的のための登山靴も開発されていて、凍傷で足や手の指を失っても現役で活躍しているクライマーは多いが、半世紀以上も前の当時では再起には想像を絶する困難と努力があったと想像される。“五文足のクライマー”と言われた所以である。

また、登山が一般化し始めた当時であっても、まだ大学山岳部とそのOB達の半ば独壇場であった日本の山岳界に一般社会人の砦としての社会人山岳会を創設、戦後の登山界をリードした一人でもあった。

本書冒頭の詩、「山靴の音」。

耳を澄ましてごらん ・ ・ ・ ほら ね ね ・ ・ ・ 何処からか

古い記憶の 山靴の音が 聞こえてくる ほら 僕の全身に 滲透^{しみ}わたるように
足指の無い小さな山靴を履いていた著者には、「山靴」には特別な思い入れがあるのであろう。

この本には、初登攀も含めて数々のクライミングの情景や山に対する思いが記されているが、ここでは「ゴンベーと雪崩」という文について記しておきたい。「ゴンベーは駄犬である。だがゴンベーは大したものである。僕はゴンベーが大好きだ。」で始まるこの一文は、或る冬、上高地の徳沢園で一緒に越冬していた犬のゴンベーとアンザイレンして前穂高岳の北尾根を登るという奇妙な犬連れ山行の物語である。犬というものは雪の登りには強いが、急雪面の下りは足の爪の構造からして不得手なものらしい。1000mほども滑落し、死んだと思っていたゴンベーがまっしぐらに駆け戻って来たり、雪崩で流され生きてはいないと諦めていたゴンベーが奇跡的に生還した話など、犬情話がユーモアたっぷりに描かれている佳篇である。

二見書房 1966 年刊

挿絵の一つ ⇒

(2007 年 記)

[「山書の小溪」目次に戻る](#)



(本書挿絵のひとつ)

